

奥野健男文学論集 ②

奥野健男 文学論集

泰流社

奥野健男文学論集2

発行——昭和五十一年十月三十一日第一刷

著者——奥野健男

発行者——西村允孝

発行所——泰流社

112 東京都文京区小日向二—十八—四

電話 〇三(九四七)〇七三〇

振替 東京〇——一六三七六五番

印刷所——誠之印刷株式会社

製本所——松岳社 株式会社青木製本所

© by Takeo Okuno, 1976.

0095-11002-4447

目

次

第一部

現代の文学状況と太宰治……………九

古い小説と新しい小説……………二三

リアリズムへの疑問——中村光夫批判……………二四

芸術的感動とアクチュアリテ^イ……………四三

伊藤理論と平野公式——近代日本文学への原理論……………四六

文学は死滅するか……………六二

第二部 「文学は可能か」

第一章

純文学は可能か……………八一

大江健三郎の文学と性……………八五

島尾敏雄の文学と夢……………九〇

第二章

「家庭」の崩壊と文学的意味……………一〇四

「家庭」文学の逆襲.....	一四〇
----------------	-----

第三章

「政治と文学」理論の破産.....	一四六
「政治的文学」批判.....	一五六
「政治と文学」再論.....	一六八
『美しい星』論.....	一七九
篠田一士氏のディレッタント的批評に答える.....	一八一
武井昭夫氏の批判に答える.....	一七二
付「政治と文学」論争関係文献目録.....	一七三

第四章

「戦後派」文学批判.....	一七五
無頼派と戦後派の断絶.....	一八二
「戦後派」文学の方法.....	一八六
東洋的全体小説.....	一七三

第五章

性文学の質的転換.....	一八七
---------------	-----

快感原則による文学	三〇一
深層意識と言語	三二六
リアリズムを超えて	三三〇
「文学は可能か」初版あとがき	三三〇
「新編文学は可能か」あとがき	三三三
解題	三三四

奥野健男文学論集 2

装
幀

中
野
佳
子

第一部

現代の文学状況と太宰治

太宰治が昭和二十三年六月に自殺してからもう十幾年かになる。そんなに経ってしまったのか、という感慨とともに、太宰文学をひとつの客観的事実として、冷静にその意義を再検討し、今日の文学状況と相かわらせうる時期が来たのだという気持がする。

太宰治という作家は不思議な作家である。生きているうちは、もっぱら奇矯な作家としてのみ知られ、少なくとも戦後になるまでは少数の愛好家に読まれていたに過ぎなかった。ところが死の前後から、広範な読者に熱愛され、いまま年々若い新たな読者を獲得している。そして多くの戦後文学者——あの人がと意外に思えるような作家、批評家までが、一時期太宰文学にしたが、影響をこうむったことを、折に触れて語っている。その意味では、太宰の文学は、少しも古くなっていないし、今日もなまなましく生きていて現代に影響を与えている。このような作家は昭和文学では太宰治ひとりではあるまいか。

けれど今日の文学状況の中から太宰をふりかえると、伝說的、奇跡的という形容さえ用いたくなるほど、隔たった異質の文学者として感じられる。つまり現代の日本文学は、太宰とは正反対の方向に進んで来てしまったのだ。太宰文学のような発想や方法を否定し、克服するところから戦後の文学は出発し、文学概念も作家の姿勢も生活もすっかり変わってしまった。それはよいとかわるいとかの問題ではなく、時代の必然的な成り行きである。太宰の死後、彼のような作家も、作品も全く後を断ったという事実が、そのことを明白

に語っている。

では現代になお強い影響を与えながら、現代文学と異質な太宰文学の特質はなんであらうか。それは、彼の文学は直接作者が読者に語りかける文学であるという点にある。描写によって、實在社会と相似な小説の世界をつくりあげ、その客観的真實性によって読者を感動させるといふ、オーソドックスな小説方法を彼は用いない。描写を捨て、自己の微妙な内的真實を表現するため、あらゆる手練手管を、言葉の持つ魔術性を極限まで駆使して、読者に訴えようとする。時代の不安、生きるかなしみ、罪意識、人間への不信とそれでもやみがたい愛への願ひ、弱くそして美しい真實、このような言ひに言い難い心の秘めごとを、含羞にもだえながら告白し、作品に定着させる。そこには祈りに似たものさえ漂う。読者はまるで自分の心の秘密を指摘され代弁されているような、感動と親近感をおぼえずにはいられない。これが太宰文学の他の文学には求め得られない魅力なのだ。

その代わり、太宰のどの作品を読んでも、太宰という作者の顔が浮かんでくる。作者の主観により、すべてが規定され、説明されてしまう。もちろん太宰はただ芸もなく自己を語ったのではない。聖書、シェイクスピア、西鶴、大鏡などの古典、おとぎばなし、民話、他人の日記、書簡等々あらゆるものを利用して、そこに自己を仮託しフィクションナルな小説の世界をつくらうとした。けれどすべてが太宰に引き寄せられ、つねに作者が前面に出てくるのだ。

太宰はこのような小説作法を意識的行なつたと考えられる。従来の自然主義的な客観描写では、それぞらしく、まだるっこく、自己の真實は伝えられない。自己の日常体験をありのままつづる私小説は、照れくさく、それにかえって真實を語ることができない。

既成の何ものをも信ずることのできない現代人の、唯一の表現方法として、太宰は虚構の中で赤面したりあるいは道化たりしながら、自己の主観的真實のみを語つたのだ。

だが戦後の日本文学は、作者が直接小説に出てくるのを排する方向に進んだ。作者から独立し、それ自体が客観的な世界を構成する本格的小説を目ざしたのだ。これは安易に自己を語るだけで造型力や想像力に欠けていた日本の私小説的伝統から脱却しようとする当然の運動であった。この運動によって日本の文学は、かたわの状態から脱し普遍性と客観性を回復し広い読者の共有物になった。

けれどそのために小説らしいかたちを整えようとして内容のないつくりものの感じの作品や、社会のメカニズムを写すだけで作者の主体性を感じさせない作品も多くなった。本来ならこのような本格小説は、作者の強い想像力と構成力に支えられ、作品全体によって、作者の意図が表現されねばならないのだが、今日の文学の実情は、書かねばならぬ内的な必然性の全く感じられない小手先だけでつくった小説が横行している。太宰と同年代の作家高見順が、ヘソなし小説の流行と嘆いたのも、理由のないことではない。

このような時、読者はもっと心にじかにふれてくる中身のつまった小説を待望する。裸になって自己を表現した太宰の文学が、いまでも熱読されているのは、今日の小説によってはいやしえない渇きをうるおしてくれるものがあるからだ。

自己の内的真実を直接語りかける太宰のような文学は、いわゆる小説というジャンルから見れば邪道であろう。しかし小説というものは固定されたロマンの形式だけではなく、もっといろいろな方法があつてよいはずだ。太宰ぐらい心の中の微妙さを巧みに表現した作家は、世界に例がないのではないか。そのような彼の作品が独特のかたちで読者の心を深く揺り動かすという事実は、文学の本質は何かをぼくたちに考えさせずにはおかぬ。太宰の文学は、現代文学に欠如している要素をはっきりと示してくれる。

しかし自己の内的真実を直接語って文学にするという太宰の方法は、彼のような特別な才能と、すべてを賭けた凄絶な人生によって裏打ちされない限り不可能に近い道であろう。太宰があまりにもあざやかな作品をのこしてくれたため、その後、このたやすげで実は至難の道をあえて選ぶ文学者がいなくなってしまった

というのが実情かも知れない。ぼくたちは内的眞実を十全に表現しうる、しかも今日の状況を全体的に表現しうる新しい文学を探らねばならないのだ。

（「朝日新聞」一九六〇年六月十二日夕刊）

古い小説と新しい小説

I

「近ごろの小説、特に若い人の小説は、どうもわけのわからないものが多い。どうしてあんなむずかしい変った小説ばかり書くのだろう。漱石や藤村や直哉みたいな素直に感動させてくれる小説をなぜ書かないのだろう。わかり易いふつうの小説は時代遅れで、これからはみんなわけのわからない小説になってしまうのか。」

こんな意味のことを年輩の読者などからよく聞かれる。その疑問はもともとであり、相手を納得させるようにうまく説明することは困難である。ほくも中学生のときある文学解説書で「純文学は完全に行きづまり、芥川龍之介は自殺した。その時純文学の唯一の血路をひらき、新しい文学の旗じるしをかかげたのは新感覺派であった」と言った調子の文章を読んで文学はそんな不自由なものなのか——純文学が完全に行きづまるということなどあるのか、血路など唯一ではなくいくつもありそうなものだ、それに新感覺派の文学より、行きづまったはずの芥川の方が後世のぼくたちにびったりしているじゃないか——とはなはだ奇異な感を抱いたことをおぼえている。

その素朴な疑問は今もぼくの中で完全には解けていない。氣鋭の芸術家はいつの時代でも、在来の芸術方

法を否定し新しい芸術方法を模索している。いや新しい方法によって芸術を創り出すよりほかには、自己の芸術家としての存在価値がないかのように思いつめて、おたがいにしるぎをけずりあっている。しかしそうやってつくりあげた新しい芸術より、昔の芸術作品の方が、今日のぼくたちに、より大きな感動を与えてくれる場合が多い。それなら何も苦しんで新しい道を捜すより、今までの方法で作品をつくればよいではないか、芸術は自由なのだから何も時代に限られた方法で作品をつくる必要などないではないか、という気がする。しかし事實は昔の方法で芸術作品をつくらうとしても、決してすぐれた作品は産まれないのだ。今日には、今日の芸術方法しかない。ベートーヴェンやレンブラントやシェイクスピアの作品に感動はしても、それと同じような種類の傑作をつくることはできないのだ。

つまり芸術は、科学や技術のような進歩はないが、極めて鋭敏に時代に反応し、変貌する。そして芸術の創造は、その時代の精神状況の中からのみ産まれ、現実の社会構造と強く結びついている。

ところが、今日の日本ぐらい、時代の状況と小説の方法との間に、荒涼たる断絶が横たわっている時代はない。というより時代精神を代表するようなオーソドックスな小説の方法が全くないのだ。今日の小説の大半は、風俗小説的リアリズムの方法によって書かれている。それは数量的には膨大であるにかかわらず、少しの文学的權威も持っていないのだ。それは形骸化された自然主義の表面的、平面的描写法と、自己追及を失った私小説の安易な実感と、メロドラマ的な筋書きの野合であるに過ぎない。これは現代の文学であることを自ら放棄した文学代用品である。おそらく風俗小説的リアリズムで作品を書いている作家自身、この方法によって今日の現実を十全にとらえうるとも、また後世に残るような傑作を書きうるとも、思っていないであろう。ほかに方法は見つからないし、しかも小説を書かねば生活ができないので、情性で書き流しているだけだろう。

それにくらべれば、若い作家たちを中心とする小説は、いかにわけがわからないと言われても、今日の時